

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第4回

「仲間を増やすためには」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

2015年3月、大阪府立大学で第17回GID学会が開かれました。その前月のある日、トランスジェンダー生徒交流会の打ちあげの席で、Mさんという方から「来月のトランス全国交流会、どうする？」という話が出てきました。わたしは2005年・2008年と2度実行委員をしたので、今回は他の人にやってもらえばいいかなと思っていました。Mさんはトランスジェンダーの集まりを主催している方なので「Mさんがやればええやん」と言いましたが、Mさんは「かわってほしい」と譲りません。Mさんが「うちのグループのスタッフにも手伝ってもらうから」と言われたので、思わずこう答えました。「わたしにはスタッフとかいいひんで」。すると、Mさんは驚かれました。なにしろ、トランスジェンダー生徒交流会の打ちあげの場所です。そこには交流会にかかわってくれているたくさんの方がいます。「スタッフ、いっぱいいるやん」と言われたので、そこにいるひとりひとりに「あなたはスタッフ？」と聞きました。すると、自分がスタッフであると答えた人は誰もいませんでした。「ほら、スタッフなんていいひんねん」とMさんに言いながら、とりあえずトランス全国交流会にかかわることにしました。

それから1か月、トランス全国交流会の打ち合わせを急ピッチでおこないました。最大の問題は食事でした。ケータリングという案もありましたが、参加人数が読めないのが「つくろう」ということになりました。

翌月のトランス全国交流会はたいへんな賑わいでした。参加人数は約150人くらい。当初の予想を大幅に上回る人数です。厨房は大忙しです。飲み物も近くのスーパーに買いに行かなければなりません。そんな交流会を支えてくれたのは、「手伝うよ」と言ってくれたたくさんの人たちでした。なかには遠く徳島からわざわざ交流会を手伝うために来てくれた人もいました。そんな人たちのおかげで、交流会は大成功でした。

考えてみると、わたしはいつもひとりです。それは京都で高校教員をしているということと、もしかした

ら不可分かもしれません。例えば人権教育などの全国集会の他府県のレポーターを見ると、会場にはたくさんの仲間がいて、レポート前には励ましの言葉をかけてもらい、レポートが終わったら仲間に囲まれてねぎらいの言葉をかけられる、そんな風景が見られます。でも、わたしがレポートする時に、会場に京都の仲間がいることは、まずありません。ひとりで会場に行き、ひとりでレポートします。終わってから言葉をかけてくれる京都の仲間はいません。そもそも、京都の人で集会に参加している人はほとんどいません。

実は、わたしがやってるさまざまな取り組みは、京都ではマイナーです。だから、わたしはそういう集会には、常にひとりで参加しています。でも、そのおかげでとても身軽です。

例えば、ある全国集会のジェンダーの分科会に参加した時のことです。夜に一緒に呑む相手がいなかったの、しかたなく友だちに電話しました。すると「インクルーシブ教育の仲間と呑んでるから、来る？」と言われました。行ってみると、今まで見たことがない風景が、そこにありました。そこで、たくさんの方や保護者から話を聞かせてもらいました。その数年後のことです。ジェンダーの分科会に参加した人たちと一緒に呑んでいましたが、お店の人から「次のお客さんが来たので早く出てくれ」と言われました。二次会のあてもないのでどうしようかとお店を出たら、「次のお客さん」は以前に呑んだインクルーシブ教育のみなさんでした。「お店を追い出されたし、混ぜて」と言うと、快くOKしてくれました。結局、ジェンダーの分科会のみんなはそのままお店の中に逆もどり、なんだかカオスな二次会になりました。

ある時、組合の集まりで「仲間を増やすために」というお題を与えられたことがありました。「安心できる組織をつくる」という答を出す人がほとんどのなか、わたしの答は「ひとりになること」でした。ひとりでふらりと誰かのところにいて、仲間に入れてもらう。それこそが仲間を増やすことと、今も思っています。